

「幸せになりたいんだ」

通学用の50ccバイクのハンドルを押しながら千夏が言う
と、隣を歩いてきた蒼司が「なればよかったのに」と意味
ありげな声で言った。

「友岡の告白蹴つといて、何言ってるんの千夏」

詰め襟の上から巻いたマフラーの中に横顔を埋めながら、
蒼司は不快そうな声で言う。月夜に照らされた、蒼司のくつ
きりとした眉の付け根に皺が寄っていた。本気で嫌そうな
表情だ。

大学受験の二次試験を間近に控えた蒼司は恋愛どころで
はないのだから、別に蒼司に自分の恋愛事情に付き合え
とは言っていない。彼女ができて浮かれているわけではない
のだ。告白は断った。蒼司に責められる謂れはない。

千夏だって彼女ができれば何でもいいというわけではな

ちに《何となく違うな》と思つてすぐに別れた。

以前彼女だった女の子は、大した理由もなく振られて可
哀想だったし《千夏が女を弄んだ》とひどい噂を立てられ
たけれど、それが千夏の誠実だ。理由はよくわからないが
彼女が違うのはわかる。だから互いのためにも早く別れた
ほうがいいと思つただけだ。彼女にも、彼女に落ち度があつ
たわけではないことと、嫌いになつたわけでもないことを
ちゃんと伝えた。彼女はいい子だったけれど、千夏の求め
る幸せとはなんだか違うし、このままがんばってもこれ以
上好きになれそうにはないから別れようと言つた。

説明すると彼女は怒つた。彼女に悪いところが発生した
わけではなかったから当然だと思つたが、蒼司が同じくら
い激怒するのが理解できなかった。蒼司にもちゃんと説明
をした。《俺は幸せになりたいんであつて、彼女が欲しいわ
けじゃない》と。

「蒼司にも話したじゃん、なんていうかさ……」

「なに」

い。蒼司にはちゃんと理由も話したはずだ、自分は《幸せ
になりたい》んだと。彼女ができれば幸せになれるなら苦
勞はしない。

「ん……。友岡はいい子だと思うけど、《絶対友岡じゃなく
ちゃ！》っていう感じじゃないんだよね」

「ずいぶんえらそうだな。俺もいいかげんに気分が悪い」

蒼司の声がどんどん低くなってゆくのがわかつて、千夏
は困つた口調で付け足した。

「だから、友岡はかわいいんだつて。どこにも問題はない
よ。蒼司だって友岡のこと、かわいいと思うだろう？ 成績
いいし、優しいしき。でも俺が言ってるのはそういうんじゃない
んだつてば」

もうこの説明をするのも何度目だろう、と千夏はため息
をつきたいのを堪えて蒼司に言い返した。けつして恋愛が
面倒くさいというのではない。付き合ってみたら気が変わ
るのかもしれないと思つて、これまで何度か彼女をつくつ
てみたが、案の定、付き合いはじめていくらもたたないう

同うように切り出した千夏の声に、跳ね返る返事も冷たい。
まったくこつちを見ようともしせず、俯いて黙々と歩く蒼
司を横目でちらりと見てから、今日は更に機嫌が悪いな、
と千夏は思つた。

「誰かをちゃんと愛したいと思うんだけど、相手が見つ
からないっていうか。何となくこの人じゃないっていうか、
イイんだけどなんか違うっていうか」

言ってみて自分でも鼻持ちならない台詞だなと千夏は
思つたが、聞いているのが蒼司だから言うのであつて、
他の誰の前でも、当然友岡の前でも言つたりしない。

本当に理由はそれだけだ。前から少しも変わらない。

どんなかわい女の子を目の前にしても《なんだか違う》
とわかつてしまう。気にくわれないとか、自分に釣り合わな
いとか、そこまで高慢ちきなことを考えているわけではな
いのだ。

「じゃあさ、蒼司は俺が《多分この子じゃないんだよね》
と思ひながら、まあまあ女の子と付き合うのついでいいと

思う?」

「……最低だと思つ」

「だろ?」

ようやく同意を得られて千夏は少し明るい声を出した。

幸せになりたいと言ってくせに女の子とも付き合わない自分を蒼司は責めるが、いい加減なことをしても蒼司は怒る。

自分にもちゃんと良心はあるのだと蒼司に主張して、またちらりと蒼司を見る。ちょうど外灯の灯りの中に入つて眉間の皺を消した代わりに少し寂しそうに目を伏せている蒼司の表情がよく見えた。

蒼司のマフラーがやけに暖かそうに見えて、千夏は唇をすばめて息を細く吐き出してみた。煙草の煙に見えそうなくらい、はつきりと白い。鼻先はとづくに冷たかった。

ここは四国も瀬戸内側だ。全国的に見れば沖繩について暖かい気候かもしれないが、二月はそれなりに寒い。年明けに一度雪を見た。天気予報では、このあと天気は下り坂だと言っていたから、もしかしたらまた雪が降るかもしれない。

について感想を述べたことなどなかった。

もしかして泣いている友岡とすれちがいでもしたのだろうかと千夏は想像したが、それもやっぱり友岡と付き合う理由にはならない。

「知ってるよ。だから友岡が嫌いなんじゃないんだつてば。ただ、《もつといい人》が別にいるんじゃないかとか、なんか違つよなあつて思つちゃうだけで」

千夏はずつと向こうにある点滅している赤信号に目を留めながら答えた。空気が冷たいせいかな今夜はやけに赤い明滅がはつきり見えた。あんなところにあつたつて、朝まで誰も通りそうにない信号だ。全体的に香川は妙な無駄が多い。交通量に対して道路は無駄に広く、舗装もいい。一人あたりの税金額にすればかなりの分配率になると、東京から帰るたび兄が苦笑いしていた。

五メートルくらい先にある街灯の、水たまりのような光の円に向かつて歩きながら、千夏は軽く肩を竦めた。

「これから先、大学に行つて、社会に出て、いろんな人と

ない。

大通りから離れると、途端に灯りが減つてゆく。

CDショップと本屋をハシゴして外に出てみたらすでにとつぷり日が暮れていた。最近いつもこんな時間だ。今日は友岡の件があつたのに、これでもまあまあ早い方だった。

なけなしの街の灯りが背中に遠ざかつてゆくのを感じながら、暖かそうな灯が漏れる住宅の塀の横を歩く。

ブロック塀の横を過ぎ、次の外灯の下に辿り着いても蒼司は何も言わなかった。バイクの荷台に徒歩通学の蒼司の通学鞆をのせて道路沿いの歩道の中を歩いていた。

中心地と言つても四国の田舎だ。夕方七時を過ぎれば車の音がして、角を白い乗用車が曲がつてくる。ヘッドライトに半身を照らし出されながら蒼司が小さな声で言った。

「でも、友岡は優しいよ。かわいいと思つし」

珍しく、女の子を庇うようなことを蒼司は言う。千夏の恋愛への姿勢に苦言を呈することはあつても、蒼司は相手

会えば、俺の《本当の運命の人》と出会えるかもしれないだろ? そこまで大げさじゃなくても、《コイツとなら一生幸せに過ごせる》つて思える女に出会えると思う。まだ俺はその人と出会つてないんだと思うんだ。妥協するにしたつて、こんな小さい世界しか知らないのに、まだ諦められない」

「千夏が言うど、嫌みにしか聞こえないから困る。実際告白されたの何人目?」

「ええ? 何人かな……。十……。二人? でも全部断つたよ?」

「俺の知らないところだそんな」

「三年になつてからだからさ」

思い切り引いた声音で叫ぶ蒼司に、言い訳のように千夏は答えた。久しぶりに蒼司と目が合った気がして嬉しくなつたが、蒼司はすぐに頭を抱えたそうに俯いた。

「十分だよ」

「一年とか二年とか、香西校の子とか、合わせてだよ?」

「わかつてるよ。うちのクラスの女子ほぼ全員が千夏を好

きだつたらびつくりだよ」

少し長めに額にかかると前髪の下で、蒼司はいつそう眉の歪みを強くして、ため息をついた。

怒っているというより呆れた顔だ。

蒼司の横顔は、月の青にとても似合っていた。すつと長い目尻も、尖った鼻先も、最近授業中にかける眼鏡も彼の静かな賢さを象徴するようで、いいな、と思つて眺めたこともあった。

地味というのとも違う、凜としていっているのだろうか。たぶんこういう顔つきが自分は好みなのだろうと千夏は思う。

頬骨まで届く、蒼司の前髪を眺めたあと、千夏は星空の下に横たわる黒い山の稜線を眺めた。この向こうには新しい世界と未来がある気がした。朝日のように輝かしく、必ず昇ってくる未来だ。

「大学出たら、嫁さんもらつて、時々四国に帰れるところに就職してさ、盆正月にはおまえに会いたい。今年の夏休

たら、蒼司絶対嫌だつて言うし」

「訊いてみなきゃわかんないだろう？ 騙されるよりいいよ」

「騙してないよ」

「わかっているけど、考える時間をくれつて言つてるんだつてば。千夏はいつも唐突だから」

「そつでもないと思つよ」

と言いつ返すと、沈黙が返ってきた。何が何でも否定する気だ。「でも」と言つて千夏は蒼司に笑いかけた。

「蒼司とずつと一緒で、俺はすごく楽しかった。蒼司は？」

「楽しかった……けど」

不機嫌そうに呻く蒼司に「だつたらいいじゃん」と千夏は笑つた。

四国八十八カ所巡り。《お遍路さん》というやつだ。

四国を縁取るように八十八ある霊場をひとつひとつ訪ねてお参りする。

今はバスツアーや車やバイクを利用する巡礼者も多いが、四国では歩いて巡つて一人前だ。

みにもう一巡、お遍路をこなして、再来年は逆打ち行くだろ？ 蒼司」

そう言いながら千夏は、足元の小さな菊のような白い花をぱつとみつつ一度にちぎつて、「この花だつたかな、懐かしいな」と、手を伸ばしてぐるぐる蒼司の手のひらに落とした。

黄色い花芯を持つ小さな花は、蒼司の手に花びらを回しながらころんと転がった。

蒼司は、眺めてため息をついた。

「行つてもいいけど、今度は計画性を持つて頼む」

「悪かつたつて。でも思い立つたが吉日つて言うだろ？」

「それにしたつて急すぎる。夏休みに入つてからお遍路に行く計画立てるなんて普通しないだろ？」

「だつて夏休み何するか特に思いつかなかつたし。暇だからお遍路行つてみる？ とかなるじゃん」

「ならないよ。俺はすごく騙された。千夏が《泊まりがけの遠足だと思えばいい》とか簡単なこと言つから」

「でもだいたいホントだろ。めちやめちやしんどいつて言つ

白衣、菅笠、金剛杖に身を固め、納札を片手に八十八カ所の《札所》と呼ばれる霊場を巡る。

香川生まれの千夏でも八十八カ所を一気に巡る《通し打ち》は初めてだつた。休みのたびに何度かに分けて巡る《区切り打ち》はひと通り体験済みだつたが、通し打ちとはキツさが比べものにならない。

蒼司が不服そうなのは《通し打ち》の計画を夏休みに入つてから思いついて、八月一日から始め、三十一日に倒れ込むようにして、かるうじて終わったことについてだ。

普通なら四十日、ゆつくり回れば五十日。

一応千夏は経験者だつたしいちはん体力のある年頃だが、

新学期という鞭がなければ間に合わなかつたくらいは無茶

なペースだ。尊い巡礼の旅。その果てに自分たちに残つた

のは、達成感とか信仰心よりも、なんとか新学期に間に合つ

たというみつともない安堵だつたと思ふ。